

パンフレットづくりが生み出した実社会とつながる学び

金沢市立十一屋小学校 教諭 福田 晃 松本 啓孝

キーワード：パンフレットづくり，社会に開かれた学び，タブレット端末

1. はじめに

昨今、国語科の授業において、パンフレットをつくる授業はよく目にする。だが、作成したパンフレットが実際に活用されることなく、学びが教室内で終止してしまう例も少なくない。そこで、本実践では、児童が作成したパンフレットによって、児童が実社会とつながり、その学びの過程において、生まれた絆を学びの動力源としていってほしいと考えた。

また、手書きでパンフレットを作成すると、写真準備に煩雑さ、修正意欲への減退などのデメリットから完成度がどうしても低いものになってしまいがちである。そこで、今回はパンフレットづくりをする際に、題材収集→執筆・入力→推敲交流といった学習プロセスを1台のタブレット端末で行うことができるよう一人一台のタブレット環境を整えた。修正も容易であることから、何度も修正を繰り返し、質の高いパンフレットの制作を目指すことができると考えた。なお、パンフレットを制作する際には、Suzuki 教育ソフトのE-Reportを活用した。

2. 実践内容

本実践は、総合的な学習の時間からスタートした。その後、小学校6年光村教科書教材である「ようこそ、わたしたちのまちへ」の国語科における学習でパンフレットを作成し、さらに、総合的な学習の時間においてパンフレットの質を高めていった。

2. 1 リアルなストーリー設定

児童が主体的に動くのは、心に火がついた時である。何のために、誰に向けてパンフレットを作るかという目的意識と相手意識が明確にすることが大切だと考えた。そこで、単元導入時に金沢市観光交流課の職員をゲストティーチャーとして招き、パンフレットを作りたいとの依頼を受けるところから学習をスタートさせた。また、北陸新幹線に乗ってきた観光客（相手意識）が、手に取った時に～に行ってみたいと思うようなパンフレットを作る（目的意識）を作ることを単元のゴールとした。北陸新幹線開通の年でもあったこともあり、児童の意欲は高く、学習を進めていくことを、一つのストーリーを自らの手で進行していくように感じていたようである。

2. 2 こだわりを持ったパンフレットづくり

パンフレットで取り上げる場所は、「金沢駅」、「ひがし茶屋街」、「近江町市場」、「金沢城」、「兼六園」、「金沢中央エリア」の6カ所であり、エリアを1カ所選択し、一人が1ページを担当することとした。選択したエリアに実際に見学に行き、自分の目で見て、インタビューをすることにより、それぞれが取り上げる内容にこだわりを持たせたいと考えた。そして、見学の後に、単に「金沢駅のことを伝えたい」という抽象的なテーマでは、いいパンフレットはできず、「金沢駅にあるもてなしドームの美しさを伝えたい」といった具体的なテーマを持つことを共通の土台とした。

児童は、調べたことをどのように表現するか、構成

を考え、文章化し、E-Reportを使って、自分なりにまとめていた。だが、観光客が手に取ったときに、「～に行ってみたい」と思うような質の高いパンフレットをつくることは容易なことではない。そのために、個人でつくったものを他者の評価をもとにした推敲が必要であると考えた。児童からも友達にチェックしてもらいたいという声があがったため、同じエリアのメンバー同士で推敲を行い、質を高めるための時間を確保した。だが、児童から、「一緒に行っていないメンバーが見たらどうなるのかな？」というつぶやきが出たため、違うエリア同士のメンバーでも推敲を行った。行ったことのない場所のパンフレットを見ていることもあり、「ここもっと詳しく書かないと分かん。」や「何のこと伝えたいの？」といった指摘が見られた。つまり、ここでは、パンフレットの質を高めるために児童の前にかべが存在し続けていたことになる。このかべがあることによって、自然とパンフレットの質は高くなっていった。



写真1 タブレット端末でパンフレットを作成する児童

2. 3 プロによる指摘と推敲

夏休みの期間を利用し、国語の授業において作成したパンフレットを金沢市観光交流課の職員の方に見ていただいた。すべてのページに朱書きで修正のポイントを書いていただいたが、2学期にゲストティーチャーとして迎え、修正のポイントを伝えていただいた。

国語の授業において、何度も推敲を重ねてきていたこともあり、児童らは、自分たちが作ったパンフレットは金沢パンフレットとしてふさわしいと思っていたようである。だが、実際に、金沢市のパンフレットを作成しているプロから不十分な点を指摘され、パンフレットの質を高めるために修正しなければならないということに気がついていた。具体的には、「地図がないこと」、「店の住所や番号が記載されていないこと」、「パンフレットのコンセプトが明記されていないこと」、「フォントなどの体裁の統一がないこと」などパンフレット全体に関することであった。

また、自分たちなりに頑張った作ったパンフレットの指摘の点が多かったため、今後の学習意欲に悪い影響が出てしまうのではないかと不安であったが、その心配は杞憂に終わった。むしろ、授業終了後にも、どうすればいいかを、自ら聞きに行く児童や、

これからの学習計画を考え出す児童も見られた。児童にとっては、大きなかべだと感じたはずだが、よりよいパンフレットを作りたいという思いが、彼らの学習意欲をさらに高めていたようである。



写真2 授業後も修正のポイントを確認する児童

2. 4 県外小学校との交流

この学習の取り組みは地元新聞社にも取り上げられ、制作したパンフレットが実際に活用されることになった。北陸新幹線開通に伴い、修学旅行先が金沢となった埼玉県加須市立大桑小学校の児童が金沢を観光する際に、このパンフレットを活用するとのことである。ここで、「埼玉県加須市立大桑小学校の児童のため」という、さらなる目的意識が児童に生まれ、観光交流課職員の方に指摘された内容を参考にしながらより質の高いものを目指していくこととなった。

また、交流先の児童と手紙を交換するうちに、普段接することがない相手であるがゆえに一度会ってみたいという意識が高まり、パンフレットを直接手渡したいという思いが児童に芽生え始めた。児童は出迎えの計画を企画し、北陸新幹線を降りてきた児童と対面し、直接パンフレットを渡すことができた。初対面であり、滅多にない機会であるがゆえに、緊張している様子ではあったものの、直接手渡すことができ、児童らは満足感に満ち溢れていた。



写真3 パンフレットを直接渡し、交流する児童

後日、パンフレットを手に金沢を観光した感想の手紙と、その際の映像が児童のもとに届き、それを見た児童からは「これまで頑張ってきてよかった」という自然なつぶやきが見られた。その後も、手紙の交流は卒業まで続き、パンフレットを介して新たな絆が生まれることとなった。

3. 実践の成果

自分たちが制作したパンフレットが実際に活用され、大きな反響が返ってきたことによって、児童らは自分たちのパンフレットに誇りを持つようになった。もっと、多くの人の手にとってほしいとの思いから、馳文科大臣（当時）にもパンフレットは届けられ、パンフレット見られた馳前文科大臣から手紙が児童のもとに返ってきた。卒業を前にして、手紙が返ってきたこともあり、最後まで非常に大きな満足度を持続することができた。

本実践における児童の学びは教室のみで終止せず、常に実社会とつながっていたこととなる。つまり、【同じ学年の仲間】と協働意識を持ちながら、市役所職員やお店の方といった【地域社会の人々】と関わり、最終的には【県外小学校の児童】と交流を行うことができた。パンフレットを制作する過程において、3つの絆を深めることにつながったと言える。

なお、この学習に関して、保護者からも反響が多く見られた。児童の引率を申し出てくれる方や、休みに児童を取材に連れていってくれる方などの協力が多数得られることとなった。結果的に、学校における学びを介し、家庭との連携も深まることにもつながった。

本実践では、児童にとって実社会におけるリアルな相手意識・目的意識があり、情報を収集し、整理分析を通してパンフレットを作成していった。さらに、一度パンフレットが完成して満足するのではなく、新たな相手意識・目的意識が設定されることで学習サイクルが繰り返し行われていくこととなる。なお、これらのサイクルを下支えしていたのは、タブレット端末をはじめとしたICTの活用であったと言える。



図1 本実践における学習サイクル

4. 今後の課題

総合的な学習の時間における探究的な学習が必要とされる、問題解決的な活動のサイクル（課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現）の繰り返しは、パンフレットを手渡しするまでは本実践においても見られた。だが、パンフレットを手渡してからの交流学习では、この問題解決的な活動のサイクルが十分に授業デザインの中に組み込むことができなかった。この点については、改善の余地があったかもしれない。

また、次期学習指導要領では、特色の一つとして「社会に開かれた教育課程の実現」が打ち出されていくこととなる。この実践で終止するのではなく、社会に開かれた学びをいかにデザインしていくかを検討し続けていきたい。